

Title	スリランカ人日本語学習者による自他動詞の選択傾向 ： 使用場面の影響に着目して
Author(s)	ダサナーヤカ, オーシャディ
Citation	日本語・日本文化研究. 2020, 30, p. 193-206
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77716
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

スリランカ人日本語学習者による自他動詞の選択傾向 ー使用場面の影響に着目してー

ダサナーヤカ オーシャディ

1. はじめに

日本語における自動詞・他動詞(以降「自他」とする)は日本語学習者にとって日本語の文法の中で困難な項目である。相対自他動詞は形と意味の面で似通っていて、さらに自他動詞と使う助詞も変更する点でさらに困難な項目であるといえる。それゆえ日本語教育研究で日本語学習者の動詞の自他の選択に関する研究が進められている。

筆者の母語であるシンハラ語では自他動詞の区別はあるが自他と「が」、「を」のように助詞の使い分けがない。そしてシンハラ語の自他動詞を形体的に区別するのは難しく、動詞の自他を選択するのは行為に対する意志の有無からである(ラトナーヤカ 2012)。従って、話者は意図して、ある行為に参加しなかった場合は動詞の自動形を選択する。逆に他動形を使うと故意にその行為をしたというニュアンスが加わる。しかし日本語では、母語話者が動作や状況をコントロール可能な状態で、話者により好ましくない事象が生じた場合、他動詞を用いて動作のコントロール性をより大きく表現した方がポライトネスが高くなると考えられていると牧原(2016)は説明している。そうであれば、シンハラ語を母語とする日本語学習者(以下 SLJFL 学習者とする)は日本語母語話者と異なるニュアンスで謝罪の場面において自他動詞を使用している可能性がある。それによって、自分の責任を回避しているかのように捉えられてしまう恐れがある。そうすると、意図せずに失礼な印象を与えてしまう可能性がある。

以上を踏まえると、SLJFL 学習者にとって日本語の自他動詞の使い分けは様々な困難点がある非常に悩ましいものであると考えられる。日本語教育の分野において他の母語話者の自他動詞の習得についての研究は、守屋(1994)、杉村(2016)、伊藤(2012、2015)、沖本(2019)、エルハディディ(2017)など多数あるが、SLJFL 学習者を対象にした動詞の自他の使用について詳しい先行研究は確認できない。加えて、シンハラ語と日本語とでは自他選択のルールが異なることを考えると、シンハラ語を母語とする日本語学習者に限定した自他研究の必要があると考えた。そこで、本研究では謝罪のような責任を表す場面とそうではない場面を例に SLJFL 学習者による自他動詞の使用について明らかにする。

2. 先行研究

守屋(1994)における自他動詞の分類(自他動詞の選択条件)は筆者の研究の出発点である。筆者は、発話者の責任が明確で相手に被害を与える場面において動詞の自他の使用について検討する。そのため、謝罪の場面を使用し調査を行っている牧原(2014、2016)も先行研究として取り上げる。さらに、牧原(2014、2016)の調査に注目し、それぞれの調査を参考に本研究の調査を進める。

自他の選択が配慮表現として機能する文法カテゴリーの1つであると初めて指摘しているのは守屋(1994)の「日本語では主体の責任の範囲での行為であれば他動詞を選ぶ - 条件5」である。守屋(1994)は日本語学習者における動詞の自他の使い分けに関するアンケート調査を行っている。調査対象者は中国系、韓国系、英語系で、日本語のレベルは初級および中級前半はほぼ終わっている留学生を対象に行われている。守屋(1994)は、調査結果で「財布を落とした」という例文に対する誤用が多くみられ、守屋(1994)で紹介されている条件5についての日本語学習者に理解不足と自他の形式的な混乱により起きた誤用であると考えていると述べている。さらに守屋(1994)では対のある自他動詞の選択において中国語、英語を母語とする学習者にとって自他動詞の難しさは自動詞表現の選択の難しさであることを指摘している。

それをもとに牧原(2012、2014、2016)では、守屋(1994)で紹介されている条件5について「話者の意思とコントロール性」「イベントの意図性」と「責任の有無表明」などの観点から、謝罪の場面における自他動詞の使用についての研究が進められている。牧原(2012)では丁寧さと関わる文法カテゴリーの1つとして動詞の自他の選択があると述べている。守屋(1994)では自他のすべての自他選択条件について調べているが、牧原(2014、2016)では謝罪という発話行為に限定して調査を進めている。さらに守屋(1994)では日本語母語話者を研究対象にしていなかったが、牧原(2014、2016)は日本語学習者と日本語母語話者を比較しながら研究を行っている。日本語母語話者の解答結果から日本語母語話者はより高いポライトネスが必要だと感じられる場合は、他動詞を用いる傾向があることが分かった。日本語の自他動詞はポライトネスに関わる表現として選択される場合があり、他動詞の使用は配慮表現ⁱⁱ⁾の一種と見なすことができると述べられている。牧原(2014)で、対のある自他動詞を用い9問からなる選択式のアンケートを使用し、日本語母語話者の回答と比較した結果から、上級日本語学習者でも配慮表現としての動詞の自他の使用を十分に理解できていない可能性があることを指摘している。さらに牧原(2016)では対象者を増やして、日本語学習者のレベル別に調査を行っている。その結果によると学習者が上級に進むに従い、他動詞を用いた方が好ましいと習得していくが、その使い分けには十分な確信が持てていない可能性があるとして述べている。

一方 SLJFL 学習者を対象に日本語の対のある自他動詞の使用に関する研究は管見の限り見当たらないが、絶対他動詞ⁱⁱⁱの選択と関連して、永井(2015)が SLJFL 学習者を対象に研究を行っている。永井(2015)で SLJFL 学習者における格助詞の習得に関し、上級・中級・下級の 130 人の作文データを使用し、助詞の誤用傾向と「が・を」の使用状況について調べている。永井(2015)では絶対他動詞を使用した場面で多くみられることとして絶対他動詞と一緒に使う助詞の中で「を」の使用については誤用率が低く安定して使用されているが、「が」の誤用率が高く、特に「を」を使うべき場面で「が」を使ってしまうという誤用が運用上大きな問題となっていることを指摘している。さらに「が」と「を」の選択には意志性やコントロール性の高低が関わっており、意志性やコントロール性が低い場合には「が」、意志性やコントロール性が高い場合には「を」が選択されていることを示している(例:「覚える、知る」という他動詞に対して「が」を取る場合が多く、「習う」は「を」を取る場合が多かったと述べている)。絶対他動詞を使用する場面における「が・を」の使用についての調査結果から指導上注意が必要であると述べられている。永井(2015)は絶対他動詞について述べているが、相対自他動詞^{iv}と助詞の選択状況と相対自他動詞で謝罪のような発話者の責任を表す場面において助詞と自他動詞の使用については調べられていない。

以上のような先行研究はあるものの、SLJFL 学習者における日本語の対のある自他の習得状況については現時点まで明らかにされていない。またこれらの先行研究では謝罪の場面とそれ以外の場面においての自他選択状況について比較を行っていなかった。従って SLJFL 学習者を対象にし、謝罪を表すような場面による自他動詞の習得状況と謝罪と無関係の場面での自他習得状況を明らかにしたい。さらに本調査では謝罪を表す場面と謝罪と無関係の場面において自他動詞の使い分けと学習者のレベルにより自他の習得にどのような関係があるのかについて検討を進める。

3. 仮説と研究課題

SLJFL 学習者にとって母語とは異なるルールで日本語の自他動詞を使用することは学習者にとって困難な点が多い項目であると考えられる。先行研究では SLJFL 学習者の自他使用について明らかにされていないが、先行研究などを踏まえると、SLJFL 学習者に日本語の対のある自他動詞と助詞の選択において困難点が多数あると考えられる。そこで、それらを明らかにするよう以下の通り本研究の仮説を立てる。

- i. SLJFL 学習者の日本語のレベルによっても自他動詞選択の正確さに影響がある可能性がある。

- ii. 謝罪と無関係の場面(テスト1)と謝罪の場面(テスト2)では自他動詞の選択の正確さに相違があると予想する。
- iii. ラトナーヤカ(2012)によるシンハラ語における自他動詞の選択を参考にすると、SLJFL 学習者が日本語で自分が相手に対して大きな被害を与えてしまったことを謝る場面でも他動詞ではなく自動詞を使用する傾向が見えてくる可能性がある。

以上の仮説を踏まえて本研究では SLJFL 学習者をスリランカの高卒卒業試験(以下、A/L 試験と呼ぶ)の日本語の能力レベルの判定結果によってグループ分けを行い、謝罪のような責任を表す場面とそうではない場面を事例に自他動詞の選択状況と困難点を明らかにする。それに伴い SLJFL 学習者の謝罪の場面と謝罪以外の場面での動詞の自他選択の特性は何かを明らかにすることを目的とする。

先行研究の調査結果を踏まえ、上述の研究目的を明らかにするために、以下の3点を研究課題とする。

1. SLJFL 学習者による日本語の自他動詞の選択の正答率に A/L 試験の試験結果のレベルが影響しているか。
2. SLJFL 学習者による謝罪を表す場面と謝罪と無関係の場面とでは自他動詞の選択の正確さに相違があるか。
3. テスト1と2において SLJFL 学習者のレベルによる自他選択傾向はどうか。

4. 調査概要

本研究は自他動詞の選択式のテストを利用し分析を行う。各問題を「が/を」「自動詞/他動詞」の組み合わせにし、正解だと思ふ助詞と動詞を同時に選択させる形式である。テストは27問である。JFLの学習者にとって複雑で答えにくい問題にならないように教科書でよく使われる、すでに学習されているような例を参考に、レベルに合わせたテストを作成する必要があると考えた。そこで本調査のテストは先行研究や、SLJFL学習者にとってよく使われる教科書である『みんなの日本語』、『サチニさんといっしょ』などの教科書を参考に筆者が作成したものである。

本調査では、自他動詞を使用する場面に応じて2種類のテストを行う。守屋(1994)の「自他動詞の選択条件」と杉村(2015)の「実態の分類と母語話者の選択傾向」を参考に以下の2種類のテストを作成した。テストのために使用する自他動詞は初・中級レベルの動詞である。守屋(1994)、杉村(2015)による「非人為的・人為的事態」を基にテスト1では謝罪と無関係の場面での自他選択を検討できるように作成した24問のうち16問を使用した。また、テスト2では守屋(1994)、杉村(2015)による「動作主の不注意により起こる、反意図的、責任範囲内」をもとに謝罪を表す場面での自他選択において作成した12問のうち11問を使用した。

なお、出題した問題例を以下に示す。「【 】【 】」内に当てはまる適切な助詞と動詞の組み合わせを選択させた。問題は2つのテストからまぜ合わせ、ランダムに並べ出題した。

問題例 1: 台風で木が【が/を】【倒れて/倒して】いて道が通れなくなりました。

- a. が倒れて b. を倒れて c. が倒して d. を倒して

問題例 2: あのう。。。先生すみません、この間お借りしていた先生の電子辞書【が/を】
【壊れてしまって/壊してしまって】本当に申し訳ないです。

- a. が壊れてしまって b. を壊れてしまって c. が壊してしまって d. を壊してしまって

問題例 3: コーヒーにミルク【が/を】【入る/入れる】とおいしい。

- a. が入る b. を入る c. が入れる d. を入れる

SLJFL学習者がそれぞれの場面での動詞の自他選択の特性と、それぞれの場面で日本語の自他動詞と助詞の選択に対するA/L試験の結果による日本語能力の影響について明らかにする。

4.1. 調査方法

本調査は2019年9月から2020年5月の間に、スリランカの大学で日本語を専攻としていた学習者43名にペーパー形式またはネット上で実施した。そして20歳-35歳の日本語母語話者45名にも同様のテストを実施し、母語話者の選択率が85%以上で概ね選択が一致したものを正答と判断して分析した。作成したテストには質問が36問あったが、ある質問で学習者の正答率に影響されたと考えた「ビビンバ、焼きおにぎり」などの語彙や、日本語母語話者でも自他の使い分けに揺れがみられた「間違う、間違える」のような動詞を含めていた質問を、テスト1から8問、テスト2から1問削除し、最終的にテスト1では16問を、テスト2では11問を分析対象とした。

4.2. 調査対象者

スリランカの高校で専攻科目として2年間日本語を学び、高校卒業試験・大学入学試験を合格し、スリランカの大学で外国語として日本語を専攻とする1年生から4年生までの学習者43名である。

4.3. 調査対象者の日本語教育と調査対象者のグループ分け

スリランカではA/L試験の成績の素点で自動的に100点-75点のものはA、74点-65点のものはB、64点-55点のものはC、54点-40点D、それ以下Fと評価される。本研究でもA/L試験の成績基準に従い、調査対象者を上位群と考えられるA(18人)、中位群と考えられ

るB(14人)、下位群と考えられるC(11人)の3グループに分けた。本調査の調査協力者の間はA、B、Cレベル以外の成績の学習者はいなかった。

4.4. 分析方法

まず研究課題1(SLJFL 学習者による日本語の自他動詞の正答率にA/L試験の結果のレベルが影響しているか)と2(自他選択場面が謝罪の場面かそうではないかが自他選択の正答率に影響するか)を明らかにするために統計的分析を行う。次にA、B、Cの各レベルの学習者による謝罪の場面とそうではない場面において特別な自他選択傾向があるかを調べる。テスト1と2をさらに「が」+「自動詞」が正答である場面と「を」+「他動詞」が正答である場面」として2つに分けて自他選択の傾向を観察する。

- テスト1

テスト1-ア(8問): 謝罪と無関係の場面で「が」+「自動詞」が正答である場面

テスト1-イ(8問): 謝罪と無関係の場面で「を」+「他動詞」が正答である場面

- テスト2

テスト2-ア(8問): 謝罪を表す場面で「が」+「自動詞」が正答である場面

テスト2-イ(8問): 謝罪を表す場面で「を」+「他動詞」が正答である場面

5. 結果分析: SLJFL 学習者による日本語の自他動詞の選択に対する日本語能力と場面の影響

本研究の研究課題1(学習者の日本語能力は自他動詞の選択の正確さに影響するか)と研究課題2(謝罪と無関係の場面と謝罪を表す場面では自他動詞の選択の難しさに差は生じるのか)について、より詳細に明らかにするために、自他動詞の選択の正答率を3(学習者レベル: Aレベル・Bレベル・Cレベル)×2(場面: 謝罪と無関係の場面・謝罪を表す場面)の二元配置の分散分析を用いて比較した(表1)。その結果、学習者のレベルの主効果 $[F(2,40)=12.349, p<.001]$ 、場面(謝罪の場面かそうではないか)の主効果 $[F(1,40)=12.728, p<.001]$ 共に有意であった。

表 1：場面による自他選択(テスト 1 と 2)の平均正答率と標準偏差および分散分析の結果

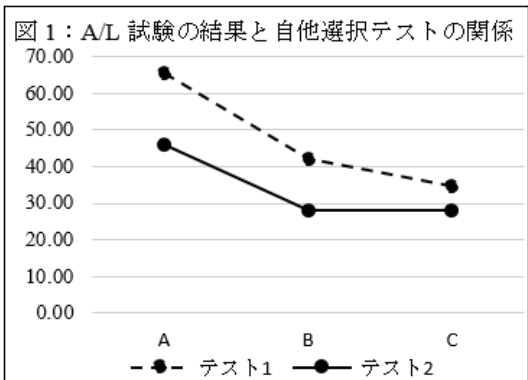
変数		平均(%)	標準偏差(%)	分散分析の主効果
学習者 レベル	A	55.79	23.39	$F(2,40)=12.349, p<.001$
	B	34.94	16.68	
	C	31.38	10.67	
場面	テスト 1： 謝罪とは無関係の場面	50.00	24.51	$F(1,40)=12.728, p<.001$
	テスト 2： 謝罪を表す場面	35.52	18.90	
	分散分析の交互作用 学習者レベル×場面			

5.1. 自他動詞の選択の正答率に対する日本語のレベルの影響

表 1 で示した通り、学習者の日本語レベルに対する主効果[$F(2,40)=12.349, p<.001$]が有意だったため、自他動詞の選択の正答率には、学習者の日本語能力の影響がみられることが確認された。そこで、どのグループの間で差が現れるかをさらに詳しく検討した。

各グループのテスト別の正答率を図に示した。図 1 から分かるように、A レベルの学習者の正答率と B レベルおよび C レベルの学習者の正答率には差が見られる。そこで、分散分析で主効果が有意となった学習者の

レベルについて、さらにシェフェの多重比較を行い、各レベルの間の差が統計的に有意なものか検討した。その結果、A レベルと B レベルの間に有意な差がみられた($p<.001$)ものの、B レベルと C レベルの間には統計的に有意だと認められる差はみられないことが分かった(A レベル >



B レベル=C レベル)。これらの結果は、自他動詞の選択の正確さには、学習者の日本語能力が関わるものの、自他動詞の選択は日本語学習者の誰にとっても難易度が高い項目で、正答率がある程度の水準を超えるには、相応の高い日本語能力でなければならないことを意味していると考えられる。

5.2. 自他動詞の選択の正答率に対する使用場面による影響

以上の分散分析の結果(表 1)によると、自他動詞を選択する場面(謝罪の場面かそうではないか)の主効果[$F(1,40)=12.728, p<.001$]は有意であった。つまり、謝罪と無関係の場面か謝

罪を表す場面かということでも正答率に差があることが明らかになった。そこで各場面における学習者の平均正答率と標準偏差を詳しく観察した(表2)。

表2：正答率の平均と標準偏差

場面	AL 試験の結果 (日本語レベル)	平均(%)	標準偏差(%)
テスト1 (謝罪と無関係の場面)	A	65.63	25.30
	B	41.96	21.29
	C	34.66	7.58
テスト2 (謝罪を表す場面)	A	45.96	21.48
	B	27.92	12.07
	C	28.10	13.76

その結果、テスト1(謝罪とは無関係の場面)の自他選択テストの正答率は、テスト2(謝罪を表す場面)の正答率より高いことがわかる。このことから、SLJFL 学習者にとって、テスト2の謝罪を表す場面で自他動詞の選択がより困難であったことがわかる。そこで、どのレベル(A, B, C)の学習者によってそれぞれの場面においてどのような自他選択傾向が現れるかについてさらに観察した。

5.3. A, B, C レベルの学習者による謝罪の場面とそうではない場面での自他選択傾向

自他選択の正確さに対する学習者の日本語レベルと自他使用場面の主効果が有意であった一方、表1で示したように、分散分析の結果、日本語レベルとテストの場面の交互作用は見られなかった [$F(2,40)=1.006, p=.375, ns.$]。従って、特定の日本語レベルの学習者による特定の場面における特異な傾向は見られなかったということになり、日本語レベルが高いAレベルの学習者であっても、そうではないBレベル、Cレベルの学習者同様、謝罪を表す場面における動詞の自他の選択はそれ以外の場面(謝罪とは無関係の場面)における動詞の自他の選択より難しいという傾向は、本研究の調査対象者であるSLJFL学習者には共通する傾向であると考えられる。

次に、SLJFL 学習者の自他選択の傾向を明らかにするために、助詞と自他の使用についてより詳しい分析を行う。

5.3.1.SLJFL 学習者による助詞と自他動詞の選択傾向

5.3.1.1. テスト 1：謝罪と無関係の場面における自他選択

表 3：テスト 1 における助詞と動詞の選択率(%)

調査協力者 グループ	テスト 1-ア：謝罪と無関係の場面				テスト 1-イ：謝罪と無関係の場面			
	a. が＋ 自動詞	b. を＋他 動詞	c. が＋他 動詞	d. を＋ 自動詞	a. が＋ 自動詞	b. を＋他 動詞	c. が＋他 動詞	d. を＋ 自動詞
A	70	4	19	7	12	61	11	16
B	51	12	21	17	17	32	22	29
C	40	13	30	18	25	27	23	25
総合(%)	54	9	23	14	18	40	19	23

表 3 と表 4 でグレーに網掛けされている部分が正答であるものを示す。表 3 は SLJFL 学習者がテスト 1 の謝罪以外の場面において自他選択を行った結果をまとめたものである。表 3 の 1-アでは「が」＋「自動詞」が正答で、A-C の全ての調査協力者のうち 50%以上の学習者が正答を選択していることがわかる。表 3：1-イの謝罪と無関係の場面で、「を」＋「他動詞」が正答である場合、正答率は 40%と高く、「が」＋「自動詞」の選択率(誤答)は低いことがわかる。そして「を」＋「他動詞」が正答である場合で、助詞の選択においては学習者は「が」より「を」を選択している。つまり「が」＋「自動詞」が正答となる 1-アでは正答・誤答に限らず、選択率が高かったのは「が」をとる選択肢で、他動詞が正答となる 1-イでは、正答誤答に限らず選択率が高かったのは「を」をとる選択肢であった。

これらの解答傾向は、学習者が対のある動詞の形を確実に覚えていなかったとしても、助詞から判断して自動詞を使わなければならないということを意識して答えを選択していることを示していると考えられる。加えて、表 3 のアとイを比較すると、SLJFL 学習者が 1-アの自動詞を選択する場面での正答率がより高く、自動詞の選択が他動詞の選択より正確にできると言えるだろう。

5.3.1.2. テスト 2：謝罪を表す場面における自他選択

表 4：テスト 2 における助詞と動詞の選択率(%)

調査協力者 グループ	テスト 2-ア：謝罪を表す場面				テスト 2-イ：謝罪を表す場面			
	a. が＋ 自動詞	b. を＋他 動詞	c. が＋ 他動詞	d. を＋ 自動詞	a. が＋ 自動詞	b. を＋他 動詞	c. が＋ 他動詞	d. を＋ 自動詞
A	50	17	20	13	41	26	19	14
B	19	40	24	17	32	24	19	25
C	30	24	30	15	43	18	16	23
総合(%)	33	27	25	15	39	23	18	21

テスト2-アと2-イの謝罪を表す場面における助詞と動詞の選択について表4にまとめる。テスト2-アで「が」+「自動詞」が適切である場合の助詞と動詞の選択傾向を見ると「が」+「自動詞」の正答率が高いことが分かる。しかし表3の1-アと比較すると謝罪と無関係の場面での自動詞の正答より、表4の2-アの謝罪を表す場面で自動詞の正答率が低いことがわかる。

一方、表4の2-イの謝罪を表す場面の自他選択傾向を見ると、正答である「を」+「他動詞」の選択率が低いことが分かる。それを表3の1-イと比較すると1-イでの結果とは異なる結果になっており、表4の2-イの方では他動詞より自動詞の選択率が高いことが分かる。つまりテスト2-イの謝罪を表す場面では、多くの学習者が明らかに他動詞を避け、自動詞を選択する傾向があることが確認できる。

表4の2-ア(つまり発話者が行為に対して直接責任がないが、自然による被害や、対象の内発的変更によって起こることに対して謝罪を表すような場面)と2-イ(つまり発話者が行為に直接関わるような責任がある、謝罪を表すような場面)を比較した。発話者の責任がないような謝罪の場面(2-ア)で正しく自動詞を選択した学習者が多くみられる。また、発話者の責任が明確である謝罪の場面(2-イ)でも自動詞の選択傾向が見られる。特に中位群と下位群の学習者が発話者の責任が明確である謝罪の場面で自動詞を多用することが分かる。上位群の学習者は発話者の責任が明確である謝罪を表すような場面以外の場面(つまり1-ア、1-イ、2-ア)では正答率がいつも50%以上で高かったが、2-イの発話者の責任が明確である謝罪を表すような場面での正答率が非常に低くなっている。上位群の学習者でも謝罪を表す場面で責任を表す際には他動詞を使用する傾向があることから、上位群の学習者でもこのような場面での自他選択は十分に習得できていないと考えられる。

以上のように謝罪と無関係の場面と謝罪を表す場面での自他選択を比較して見ると、SLJFL 学習者が謝罪を表す場面において助詞と動詞の選択には混乱がみられることが分かる。

6. まとめと考察

本研究では SLJFL 学習者を対象に日本語の自他動詞を謝罪の場面と謝罪と無関係の場面で学習者のレベルによってどの程度理解できているかについてテストを使用し検討した。先行研究の主張と本研究の仮説を踏まえると本研究の結果は以下のように解釈できる。

謝罪の場面において日本語学習者の自他使用については牧原(2014、2016)が指摘しているように上級日本語学習者でも配慮表現として自他動詞を十分理解できていない可能性があることが本研究結果でも確認できた。仮説1で予想したように学習者の日本語のレベルによっても自他動詞選択の正確さに影響がある可能性があるため、A/L 試験の結果をもとに調べた結果、A レベル(上位群)とそれ以外の B レベル(中位群)・C レベル(下位群)の間に

は有意差があり正答率に学習者のレベルの影響がみられることが明らかになった。つまり正答率に差が出るためには、かなり高い日本語能力でなければならないことを意味していると考えられる。一方、中位群と下位群では学習者の正答率における差が有意ではなかった。つまり日本語学習が少し進んだとしても自他動詞の使い分けが正確にできるようになるとはいえないだろう。さらに牧原(2016)では学習者が上級に進むに従い、謝罪の場面で他動詞を用いた方が好ましいと習得していくが、その使い分けには十分な確信が持てていない可能性があるとして述べていた。しかし本研究の結果によると SLJSL 学習者の場合は、特に謝罪のような場面で自他動詞を使い分けるのは難しく、牧原(2016)がのべているように習得が進むにつれ正しく使用できるわけではなく、日本語がかなり習得できている学習者でないと謝罪を表す場面ではある程度の正確さで自他動詞を選択することは困難である傾向が明らかになった。

また、牧原(2014、2016)で謝罪の場面と無関係の場面での自他選択について比較が行われていなかったが、本研究ではその点についても検証した。謝罪の場面と謝罪と無関係の場面では自他動詞の選択の正確さに相違があるかについて調べた結果、やはり仮説 2 で述べた通り、自他動詞を選択する場面が、謝罪と無関係の場面か謝罪を表す場面かということで正答率に差が見られた(2つのテストに回答した日本語母語話者の選択率が 85%以上でおおむね選択が一致したものを正答と判断して分析した)。しかし、学習者の日本語レベルによって自他使用場面(謝罪の場面かそうではないか)における特徴的な自他選択傾向がみられなかった。つまり、学習者の日本語レベルに関係なく、謝罪の場面での自他選択は謝罪とは無関係の場面の自他選択より難しいことが明らかになった。これは SLJFL 学習者であれば習熟度に関係なく共通する特徴であると考えられる。

さらに、先行研究の主張を踏まえると本研究の調査結果を以下のように解釈できる。謝罪と無関係の場面において守屋(1994)では対のある自他動詞の選択において中国語、英語を母語とする学習者にとって自他動詞の難しさは自動詞表現の選択の難しさであると指摘されていたが、SLJSL 学習者の場合は自他動詞の難しさは他動詞表現の選択における難しさである傾向がみられた(表 3)。しかし永井(2015)によると、絶対他動詞を使用する場面において永井(2015)の対象者であった SLJFL 学習者は「を」の正答率が高く「が」の誤用が目立ったと報告されている。本調査のテスト 2-I(謝罪を表す場面で「を」+「他動詞」が正答である場面)では「を」の選択の正答率は低く、異なる結果がでた。つまり、永井(2015)の相対自他動詞の場合の「知る、覚える」のような動詞の使用と同じく、本調査協力者であった学習者が本調査のテスト 2 の謝罪を表す場面での動詞を「コントロールできない、意思的ではない行為」として理解した可能性があり、テスト 2 では、永井(2015)と同じく「が」の誤用が表れたと考える。

以上の結果を踏まえると SLJFL 学習者が自分が相手に対して大きな被害を与えてしまったことに対して謝罪を表すような場面で他動詞ではなく自動詞の選択傾向がみられた。こ

のことは SLJFL 学習者が使用場面によって責任があるかないかを意識して自他を選択しているわけではないということの意味していると考えられる。先行研究(ラトナーヤカ 2012)で述べられている通り、シンハラ語母語話者は動作をコントロールできるかということに基づいて動詞の自他を選択するのではなく、動作に対する動作主の意志を基に自他を判断しているが、それが SLJFL 学習者の日本語の自他選択にも影響を与えていると考えられる。母語による影響があるとともに SLJFL 学習者が自他選択する際には対のある自他動詞がどちらが自動詞でどちらが他動詞であるかが十分に身に着いていないことが分かった。それゆえ助詞から判断し、自他選択する傾向があるため特に謝罪の場面では誤用を起こしやすいことが明らかになった。これらの結果から仮説 3(SLJFL 学習者が日本語で自分が相手に対して大きな被害を与えてしまったことを謝る場面でも他動詞ではなく自動詞を使用する傾向が見えてくる可能性がある)を支持する結果が得られた。しかし、先行研究では日本語の自他動詞はポライトネスに関わる場合があり、責任をあらわす場面で他動詞の使用は配慮表現の一種と見なすことができると述べられている(牧原 2014)。つまり、自分に責任のあることを示す場面として典型的な謝罪場面においては、動詞の自他選択で文の意味に大きな影響を与える。そうであれば、SLJFL 学習者は謝罪の場面で自他の使用について、より注意を払うべきだと考える。

以上を踏まえると、今回の調査結果では SLJFL 学習者の自他選択における困難点として、SLJFL 学習者がどのような使用場面でも動作に対する動作主の意志を基に自他を判断するために誤用を起こしやすいこと、対のある自他動詞を選択する場合は学習者がどちらが自動詞でどちらが他動詞であるかを使い分けるのが難しく助詞から自他判断をしてしまうことで誤用が起りやすいことがあげられる。

SLJFL 学習者にとって以上のように使用場面の影響で、自他選択が困難になる傾向があり、場合によっては、自他動詞の選択を誤ることによって、謝罪する場面であるにもかかわらず、自分に責任がないかのようなメッセージを相手に伝えることになってしまう恐れもある。そのため、学習者が日本語の自他選択を学ぶ場合には、母語話者の自他の選択傾向とも比較しながら学習する方がより日本語を使えるようになると考える。SLJFL 学習者の場合は謝罪の場面での自他選択が非常に困難な項目であり、日本語の自他動詞の指導においては場面を意識できるように指導するべきではないかと考える。

7. 今後の課題

本研究では調査対象者を3つのレベルに分けて比較したが、各グループの対象者数のバランスが取れなかった。また、テスト1と2で使用した問題数も統一できなかった。今後は学習者、使用場面、問題を増やして分析をおこないたい。また、SLJFL 学習者の調査結果を他の母語話者と比較し SLJFL 学習者の特徴をより詳しく調べる必要もある。その他

に、本研究では動詞の自他を選択するテストを用いた調査を進めてきたが、実際の言語運用(メール、会話)ではSLJFL学習者がどのように動詞の自他を使い分けているかについても研究を進める必要があると考える。

[参考文献]

- 伊藤秀明(2012)「学習者は「対のある自他動詞」をどのように使っているか：中国人日本語学習者の中級から超級に注目して」．『国際日本語研究』4, 43-52
- エルハディディ, アブデルラフマーン(2017)「アラビア語を母語とする日本語学習者の自動詞・他動詞の選択について」『日本語・日本文化研究』27,194-203
- 沖本与子(2019)「日本語学習者の助詞・動詞選択の傾向：自動詞他動詞の比較を中心に」．『言語資源活用ワークショップ発表論文集』4,51-65
- 小野正樹・季奇楠(2016)『言語の主観性-認知とポライトネスの接点』くろしお出版
- 江田すみれ・掘恵子(2017)『習ったはずなのに使えない文法』くろしお出版
- 杉村 泰(2016)「英語を母語とする日本語学習者における日本語の自動詞・他動詞・受身の選択について：動作主の不注意による対象の変化を表す場合」．『ことばの科学』30, 5-20,名古屋大学言語文化研究会
- 滝浦真人(2008)『ポライトネス入門』研究社印刷株式会社
- 永井 絢子(2015)「スリランカ人日本語学習者の格助詞の習得：シンハラ語母語話者の作文に見られる「ガ」を中心に」．『公益社団法人日本語教育学会』161,31-41
- 牧原功(2012)「日本語の配慮表現にかかわる文法カテゴリー」．『群馬大学国際教育・研究センター論集』11,1-14
- 牧原功(2014)「配慮表現と動作のコントロール性」．『日本語コミュニケーション研究論集』3,63-72
- 守屋三千代(1994)「日本語の自動詞・他動詞の選択条件—習得状況の分析を参考に」．『講座日本語教育』29,151-165,早稲田大学日本語研究教育センター
- ラトナーヤカ ディルルクシ(2012)「非意志性の分析:シンハラ語をはじめアジア語の状況を巡って」名古屋大学博士学位論文
- Penelope Brown & Stephen C. Levinson (1987)、 *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge University Press
- Research Center for Japanese Studies, University of Kelaniya (2018) 『スリランカ A レベル、Prescribed Japanese Language text Book-A Level 「サチニさんといっしょ」』 Educational publications Department

[参考 URL]

国際交流基金-スリランカ(2016年度)-「日本語教育国・地域別情報」

<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2016/srilanka.html> 2018年09月16日検索

[G.C.E (A/L) Examination 2019- Performance of Candidates]

https://www.doenets.lk/documents/statistics/2019-AL_Analysis_Book.pdf 2020年07月02日検索

相対自他動詞(中石(2005)では「対のある自動詞・他動詞と呼んだ): 対応する自他動詞を持つ動詞(壊れる・壊す、温まる・温める)(伊藤 2012)」。本稿でも用語を以上に従う。

ⁱⁱ 滝浦真人(2008)『ポライトネス入門』を参考にここで扱う「配慮表現」とは、主に FTA を回避するために選択される表現のことであるが、FTA を増大させてしまうような表現については「負の配慮表現」とあらかず。これらのことを踏まえると、「謝罪」とは、自分の領域を他人に侵されたくないという相手のフェイスに配慮するための表現であるということができる。

ⁱⁱⁱ 絶対自他動詞: 対応する自他動詞を持たない自動詞(走る、転ぶ)と他動詞(押す、置く、ぬる、探す)

^{iv} 相対自他動詞: 対応する自他動詞を持つ動詞(壊れる・壊す、温まる・温める)。

^v A/L (Advanced Level Examination) 試験とはスリランカの高専卒業認定試験で、学校で専攻する科目を大学でも学び続けるためには A/L 試験を合格する必要がある。合格した学習者の中で全員はスリランカの公立大学に入学できるわけではない。専攻科目 3 つの GPA 順に大学に入学することができる。スリランカでは A/L 試験が習熟度テストとして使用されていて、大学入学試験でもあるといえる。